温度差は１０℃

涼村怜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
温度差は１０℃

【Ｎコード】
Ｎ４１９１Ｆ

【作者名】
涼村怜

【あらすじ】
私は冷え性で体温が低い。それに比べ、アイツは体温が高くて人間カイロ。私はＳだ。でもアイツはＭ（だと思う）。きっとアイツと私の間には、１０℃くらいの温度差がある。そんなアイツと私の冬の恋バナ。

今は冬。
冬休みが始まる5日前。

「さむーい」
「しょうがねぇだろ。我慢しろよこんくらい」
私はそう言って、年中暑い男の異名をもつ慧(けい)にくっついた。
慧は暑い。いや熱いの方が漢字的には合ってる。
冷え性で年中体温が低い私と比べ、慧は体温が高くてあったかい。
人間カイロ。心の中でそう思って、自分で笑ってしまう。

「しょうがなくないよ。バカ」

ちょっと言い草がムカついたので、慧の首を絞めてみる。
強めに締めてるのに、慧は全く動じない。
さらにムカついたので今度はおもいっきり叩いてみた。
「いてっ！」と言いはするものの笑って許してくれる。
何なんだ、コイツ。首絞めても、叩いても、パシリにしても、何しても怒らず笑う。
まったく、M根性丸出し・・・否、ドMと言うべきか。

私はMじゃないし、どちらかというとSに近い。
私は体温高くないし、むしろ体温は低い。
なんというか、性格も正反対で、身体の温度も正反対。
きっとアイツと私には、１０℃くらいの温度差があるに違いない。

体温的にも、性格的にもだ。

「えー、では冬休みの連絡を・・・」

先生がそう言って、資料を渡す。
冬休み、かぁ。
去年なんかは全然予定も何も入れていない。まったくもって悲しい冬休みだった。
だけど！今年は違う。
何たって、同じクラスに、しかも慧と友達の安部くんがいるからだ。

安部くんはこの高校に入学したとき、一目惚れした物凄くかっこかわいい男子。
地味面な慧とは大違い。
慧と安部くんは2年の時に仲良くなったらしいけど、この時ほど慧と友達で良かったと思ったことはない。

とにかく冬休みが始まる前までに、告白してＯＫもらいたいのだ！
きっとＯＫ貰えると思う。だって彼を落とす努力は結構したのだから。
安部くんの好きなタイプは手作りお菓子が上手い子らしく、私は上手くなるため練習した。
失敗したクッキーなどは全部慧に押し付けた。「たまには成功作もくれよ」とかいってた気がするけど、
今はそんなことかまってられない。・・・・一応ちょっとヒドかったかなとは思ってる。
そんな慧の協力もあり、私の友達の理子（りこ）の協力もあり、お菓子作りの腕は上手い！
何とか今日持ってきたこのスペシャルデリシャスクッキーを渡し、

告白するのだ！

「ってわけで、理子、慧。協力してよね」

「えー、協力？いやーよ。お菓子作りの手伝いはしてあげるけど、告白まで何でよ」

私の友達はヒドい。慧を見たら、慧は目を即座に逸らしている。確かに理子にはお菓子作りでもいいから！と手伝いを要請した。したけれど、どうせなら最後まで手伝ってほしい。

「良いじゃない。安部くんを呼び出すくらいやってよー」

「嫌。なんで私たちが呼び出さないといけないワケ？」

そりゃこっちの乙女心を考えればすぐ分かる。
恥ずかしいのだ。告白だけでも心臓が止まるかもしれないのに、呼び出すなんてそんなこと。
呼び出しても告白ができなくなるかもしれないじゃないか。

「慧は？」

「えっ！？・・・いやついに告白、するんだ？」

そこからかよ。何の話を聞いてたんだコイツは。
癪にさわったのでまた首を絞めてみた。

「っていうかさー」

首絞めに夢中になってる私は、急にそう呟いた理子に耳だけ傾けた。

うーん、心なしか慧がいつもより苦しそうな顔してる気がする。

「安部って、好きな女の子いなかった？カワイイ子」

するり、と力が抜けた。
首を絞めていた手が緩む。

「え？」

まさか、そんな。
好きな子って誰？いたの？いつから？
そんな言葉を言いたいのに、言葉が出ない。

放心状態の私に、慧が言う。

「ドンマイ」

そんな言葉で、恋を片付けられたくない。
私は泣いた。泣いて泣いて泣いて、家でもずっと泣いた。
1日目は泣き足りなくてズル休みした。
2日目は泣きすぎたせいか、風邪をひいた。
3日目も同じく。四日目も同じく。
明日はついに終業式で。もう明日風邪治っても行くのやめようかと思っていた。

「うわー、今日も来てるわね」

お母さんが配達された手紙を見て呟いた。
何が？と訊くと、お母さんはすっと紙切れを私に差しだす。

紙切れにはなにか文章がかいてある。差出人の名前はない。
ハガキとか手紙じゃなくて、本当に紙切れ。

「これ・・・」

「あんたが休んでから届くようになったのよ。
最初は差出人の名前も書いてないからイタズラかと思ってね。
でも、その手紙「学校」とか書いてあるし、あんた宛じゃない？」

その文の字体は、アイツ、慧にそっくりだった。
休んでから届くようになったということは、多分４枚この紙切れが
届いたということ。

「お母さん、この紙切れ、あと3枚ある？」

「そこのゴミ箱にあると思うけれど」

そういわれたのでゴミ箱を掘り起こしてみた。
いろんなゴミが捨ててある中、紙切れを見つけるのは大変だったけ
ど、何とかあった。

１枚目「元気出せ」
２枚目「泣いたりすんなよ」
３枚目「落ち着いたか？」
４枚目「明日は学校、来いよ」

ポロリ、と涙がでた。
失恋したときとは違う涙。
私はスペシャルデリシャスクッキーを、慧のために作ろうと思った。

次の日、学校へ行くと、早速安部くんと見つけた。
でも、寂しいとは思ったけれど何故だか悲しくならない。何でだろう？

「あ！来たんだ！良かった～！」

理子が私を見つけて言う。
そんな理子は私に2人っきりで話したいことがと私を屋上まで連れ出した。

「ごめん！！！」

口頭一番、理子はきっちり９０度くらいに頭を下げて、謝ってくる。
どうしたの？と訊くと、理子はポツリポツリとワケを話始めた。

「私のしたこと、かなり最低だと思う。でも、慧があんまりに可哀相で、したの。
あのね、私が言ったこと・・・安部に好きな子がいるって言ったでしょ？
あれ、嘘だったの。本当にごめん！！！」

いつもなら、許さないと思う。
いつもなら、いつもなら・・・でも、今は何故か怒りがこみ上げてこない。
それに、慧のためって・・・？多分、勘違いしていいのなら、それはきっと。

「うん、許すよ」

「！！ほんとに？・・・うん、ありがとう」

人間カイロの男は、首絞めても、叩いても、パシリにしても、何しても怒らず笑う。
アイツは、私が安部くんに告白すると宣言したときに首絞めたら、いつもと違って苦しそうな顔してた。
慧は、家が離れてるにもかかわらず４日間私の家のポストに紙切れを入れにきた。

「慧！一緒に帰ろ」

終業式が終わって慧に会う。
慧はいつもどおりにあったかい。

「おー、明日から冬休みだな」

「そうだね」

何にも予定の無い、冬休みだけど。
あんまり話が進まず、そこで会話が切れてしまう。

「あのね慧、どうしてさ、慧は首絞めたりしても怒らないの？」

疑問に思ったことを訊いてみる。
何たって話題が無いから、質問責めでいくことにした。

「ちげーよ。んなことされたら怒るぜ。フツーに」

「え？でも私しても怒んないじゃん。ハッ！もしかしてにこにこし

た仮面の裏では大激怒！？」
だとしたら怖い。そういうタイプこそ、実は陰湿で怖いらしいし。
「違う」
「じゃあ何」
「・・・」
「おーい、聞こえる？」
急に黙りこくったカイロの目の前で手を振ってみる。
何なんだろ、全く。
「ねぇってば「あー！もううるせー！」
自棄になったのように慧は叫んだ。
何だ、もう。慧が人並みに怒っちゃった。
ムカついたから首絞めようかと思ったけど、止めた。そんな気分じゃない。
むしろシカトしてやろう。
そう思って慧を放ってさっさと前に行こうとした。
「待てよ」
でも、慧が私の腕を掴む。
「痛い！このドＭ男！人間カイロ！」

にぎられた腕が痛い。離してほしくって罵詈雑言を投げつける。
慧は手の力は緩めたけど、離そうとはしない。

「言わせんなよ。全くさー・・・いいか？お前だから怒らないんだ」

お前だから、怒らない。つまり、どういうこと？
私だから、怒らない。私以外なら怒る。

今私の頭の中では、理子の言った言葉と、慧の言った言葉が行き来している。
「慧が可哀相だから」「お前だから怒らない」
もしかして、もしかすると。

「俺、もう言うけど、お前が好きだ。中学ん時会ってから、ずっとだ」

ドクリ、と心臓が跳ねる。
早鐘を打つ、って言うのかな？とにかく、心臓がドキドキする。

「だから、お前が安部のこと好きとか言い始めてすっげー悔しかった。お菓子作りのときもすごくだ」

そう言った慧の顔が凄く男らしくて、地味面なんていってゴメン、と思った。
そして慧は私が好きだったのかと思うと今更ながら照れてくる。

「今お前にこんなこというの卑怯だけどな、付き合ってほしい、と思う・・・んだけど」

さっきまでの威勢のよさが嘘のように、声が小さくなっていく。

男らしかった顔も段々真っ赤になっていく。なんだ、かわいいじゃないか。

かばんから1つの包みを取り出して、慧に押し付ける。
それは慧のために作ったスペシャルデリシャスクッキーだ。

「っ・・・！？」

「それ、慧だけのために作ったの。でも恋愛感情ナシで作ったの」

「だけど」と言葉をつむぐ。恥ずかしいけど、慧は私にちゃんと言った。
だったら私も慧にちゃんと言わなきゃ。

「今度は恋愛感情込みで、作るつもり」

慧の顔をちらりと見ると、間の抜けた顔をしていた。
変な顔だ、と思いながら今度はちゃんと慧の目を見て言う。

「私、性格的に可愛いわけじゃないし、Sだし、低体温だし。
それでもいいなら、付き合って。それで冬休みの予定、埋めてほしい」

ちょっぴり足が震える。でも、いいんだ。
慧は今度は間の抜けた顔じゃなくて照れた顔をして私の手をとる。

「知ってるよ。それ含めて、全部好きだ。お前、は？」

包容力ってこういうものだろうか。私は手を握られただけで恥ずかしくてたまらなくて。

にぎられた私の手はとても冷たい。でも、にぎってくれた慧の手はとっても温かい。
１０℃くらいある温度の違い。
「私が「スキ」って言うと思った？」
「えぇっ？言ってくれねーの！？」
「うん。言ってほしかったら、３回回ってワンと言いなさい」
「（・・・ドＳめ）」
そう、この温度差が丁度良いんだ。

（後書き）

冬で青春なお話が書きたくて書いちゃいました。
主人公の名前を出そうとおもいましたが、
出さない方がいいかな？と思い、出してません。
我ながら結構好きなお話にできました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4191f/

温度差は１０℃

2010年10月20日18時58分発行